

総合学習（英語活動領域）

山口久代 安田一志
 田川信子 古川雄次
 乗富章子 居村明子
 宮島浩典 丹後京子

はじめに

本校で英語活動をはじめて5年目を迎えている。これまで総合学習の中で、国際理解、人間、文化などの領域に位置づけをし、その意義をそれぞれに見いだしつつ実践を重ねてきた。

昨年度は、総合学習の中の一領域として、英語のコミュニケーション能力の育成を目標にして各学年年間10回程度の時間を確保してきた。内容としては、本校E.A.A.(English Activity Assistant)とのコミュニケーションを図るための活動が中心であった。

子どもにとっての英語活動は、そこで扱う内容からとても楽しい時間だったようである。しかしながら、月1回の活動では、前時の活動の内容を忘れてしまう子どもも多く、表現力は期待したほどついてこなかった。

1 領域の目標

全体論の総合学習でめざす子どもの姿「共に生きる社会や環境に自らはたらきかける姿」を受けて、英語活動を進める上で次の目標を設定した。

世界の人々と共に生きていく意識を高めるために 豊かな表現力をめざしたコミュニケーション能力の一層の充実を図る

今年度は、昨年度の反省を生かし、上記の目標に迫るために、昨年度の約2倍にあたる年間20時間を確保した。

EAAやH.R.T.(Home Room Teacher)との英語を使った様々な活動や会話を通して、英語に慣れ親しむ。そして、自分の思いを自分なりの英語表現で伝えたり、相手の思いを受け取ったりするなどのコミュニケーション能力を育成することが豊かな表現力につながると考えている。その結果、EAAも含めたより多くの外国の人に関わろうとする意欲や態度を育て、世界中の人々と共に生きていく意識を一層高めていくことができるのではないかと考えている。このような能力や意識・態度を育成することが、英語活動で求める「知性と教養」である。

さらに、豊かな表現力をめざしたコミュニケーション能力を大切にすることは、英語活動だけではなく、総合学習すべてに、また特別活動にまでつながっていくものであり、生涯学習の一端を担うものであると私たちは考えている。

2 活動（単元）を構成するにあたって

(1) 英語活動の「学び」について

英語表現や英語に関する表記は身の回りの生活の中でよく見聞きする。Thank you、Good-byeや標識、カレンダーの表現がそれにあたる。それらの日常の中で使われる簡単な英語の単語や表現を使うことはできても、英語で自分の思いを伝えようとしたり、相手の思いを受け取ることは容易ではない。これは、コミュニケーションの手段として、英語を使っていなかったり、学んでいなかったりしているからだと思われる。

そこで、本年度は、英語でコミュニケーションを図る楽しさを、EAAやHRTとの活動や会話を通して、体験的に学んでいくことを大切にしたい。具体的には、歌やゲームで自然に英語を受け入れられるようにしたり、実際の場面や状況を想定して、EAAやHRTと英語を使ってみる。また、自ら英語を使って表現するなどが考えられる。これらの会話や活動は、英語に興味・関心を持つ、英語に慣れ親しむ、英語表現

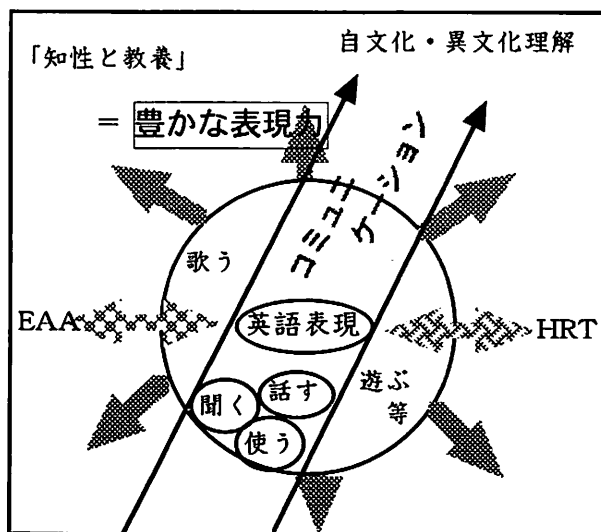


図1 英語活動における「学び」について

を使い、楽しむことにつながっていくと考えている。そして、ゆくゆくは英語という言葉を通して、「外国の人々と分かり合いたい」「外国の人々と仲良くなりたい」との想いを抱き、できる限りの英語を使って、外国の人とコミュニケーションを図ろうとする姿を期待している。

つまり、自分が使える英語を体験的に学んでいくことそのものが英語活動の「学び」であると私たちは捉えている。

(2) 学びを深めるために

英語活動が一カ月に2度(年間20回)行われ、2回に一つの表現を中心に学ぶことから、1つの活動経験が次の活動や他の活動につながるように、子どもにとって印象深く、充実した活動になるようにしたい。このような活動経験の積み重ねが、子ども達の学びを深めることにつながっていくのではないかと考えた。そこで、以下の点に留意しながら活動にあたりたいと考えている。

① 一人一人が英語表現を楽しむ場面や状況を設定する

楽しい雰囲気の中で自然に取り組める活動を工夫していきたい。具体的には、テーマに関わりのある歌やBigbookの読み聞かせ、ゲームなどを必要に応じて取り入れる。このことにより、楽しみながら英語を受け入れたり、表現したりできるようになり、コミュニケーションに必要な英語表現に体験的に慣れ親しむことができる。

また、EAAやHRTの話す言葉を聞くだけでなく、その発音を真似して、声に出して言うことを大切にしたい。英語を話すことに慣れることはもちろん、英語を使って分かり合う喜びを体験できるような場面や状況を工夫する。このような体験を積み重ねることにより、人に伝えようとしたり、伝わったことに喜びを感じることができるのではないかと考えている。

② コミュニケーションを意識する場を保障する

英語表現を耳にする機会を多くし、言葉を覚えるだけにとどまらず、文章の中にそれらを位置づけて使う場をより多く設けていきたい。

その際、これまでの活動で使ってきた表現や子どもたちが使いやすい英語、身近な事柄や状況を取りあげていくように活動内容を工夫していきたい。このことにより、英語の表現を聞いたり、話したりする活動が子どもたちにとって、より身近になる。さらに、自分の使いたい

と思える語彙や文章がふえ、自分の思いや意志の働く表現を使えるようになり、コミュニケーションの一つの手段として楽しむことができるようになってほしいと願っている。

③ EAAやHRT、子ども同士のかかわりを大切に

・EAAと子どものコミュニケーション活動を大切に

EAAと子どもがマンツーマンで対話する機会を数多く設けたい。このことにより、EAAとの活動や会話から得た英語表現を使って、実際にEAAの質問に答えたり、自分からの質問や会話をEAAに受け取ってもらう場面が増え、伝わる喜びを感じたり、話すことに自信を持つことができるであろう。

・HRTと子どものコミュニケーション活動を大切に

HRTとの活動では、EAAとの活動をより深めるためにテーマを変えずに活動内容を工夫して取り組んだり、次の活動のための準備やふり返りの充実を図るなど様々な活動が考えられる。これらの活動により、分からなかった英語表現などが明確になったり、より定着したり、次の活動の見通しを持つことができると考える。このことが、子どもたちにとって安心感や自信、次時への期待感を持つ場となるだろう。

・子ども同士のコミュニケーション活動を大切に

子ども同士でコミュニケーションを行う活動を意図的に設定していきたい。これにより、英語を使う場面が増え、習熟できるばかりか、子どもたちが相互に評価し合いながら、伝えあう喜びを実感することができる。

④ 子ども自身の変容の自覚を促す

毎時間、活動のふりかえりとしてその活動で得た英語表現を使う場を設定する。自分の得た表現を自覚し、自信にもつながるからである。また、テーマごとにできる限りふりかえりする時間を設けていきたい。特に、その時間分かったことや身についたこと等の内容面とその時の心境や気持ちの変化等の情意面の両面が自覚できるようにしたい。そのためには、ふりかえりカードの工夫と記述する時間の保障が大切になる。このカードを子ども自身がファイルしていくことが、活動内容や楽しさ・喜びなどの前向きな思いを蓄積していくことになり、必要に応じてふりかえる機会を設けることで自己の変容の自覚を促していきたい。

3 実践例

—5年—

(1) テーマ カードゲームを楽しもう！（学校生活）

- (2) 目標
- ・ “Choose a card.” “Turn over the card.” などの表現を使ってカードゲームを楽しむ。
 - ・ 英語表現だけでカードゲームを楽しみ、友達同士でコミュニケーションができる。

(3) 指導にあたって

テーマ設定について

子どもたちは、5年生になり友達の数も増え、毎日たくさんの友達と誘いあって遊ぶなど、楽しい学校生活を送っている。ここでは、カードゲームを取り上げ、友達同士で楽しむことを通して、英語を媒体とした子どもたちの意志疎通を図る。ゲームには勝敗を争う競争的な要素があり、子どもたちが夢中になるため、その中で英語を使うことで成就感を味わえるよさがある。そしていろいろな相手とゲームをくり返し楽しんでいくうちに、英語をふんだんに使い、音声に慣れるとともに表現の定着に役立つと考えられる。

第1時は、EAAとHRTとのTTで行う。ルールが簡単で誰もが知っているゲームを扱うことで、安心して英語で表現しながらゲームを進められるようにする。しかし、ルールを知っていることが逆に英語表現の必要性を感じられないことも考えられるので、英語表現のみで活動する時間を設定したり、英語で自分の点数を言わなければ得点されないなどの条件をつけるなど、既成のルールに新しくオリジナルルールを加えることで、必然的に英語で表現することをねらう。

第2時では、英語表現のみで行う学年全体でのトランプ大会を子どもたちだけで企画することで、表現の習熟とコミュニケーションの深まりを図る。

学びを深めるために

① 一人一人がゲームにかかわる英語表現を楽しむ場面や状況を設定する

本時で扱う歌「Old MacDonald Had A Farm」は、いろいろな種類の動物の鳴き声が出てくる楽しい歌である。子どもたちにもなじみのある軽やかなメロディーにのって、リズムカルに歌うことができるであろう。とても速いテンポで言葉がつながっていく歌なので、最初から全ての歌詞を聴き取って歌うことは大変難しい。ここでは、耳に残った部分やかけ声（E-I-E-I-O）動物の鳴き声など、印象的でわかりやすい部分を歌ってみようとして投げかけることによって、日本語と英語での動物の鳴き声の表現の違いを感じ取り、一人一人が自分なりに表現しようとする雰囲気を作る。そして歌に出てくる動物の鳴き声をカードゲームに取り入れることで、発音する楽しさを感じさせたい。

② コミュニケーションをめざした場を工夫する

カードゲームとして、ブラックジャックを行う。ここでは、日本語を使ってはいけないことを第1条件とし、英語で表現しながらゲームを進めていこうという意識を持たせる。そして、英語だけでゲームが進行していく楽しさを一人一人が感じることで、自分の思いや意志を表現するコミュニケーションの手段として英語を用い、伝えあうことの嬉しさを実感させたい。

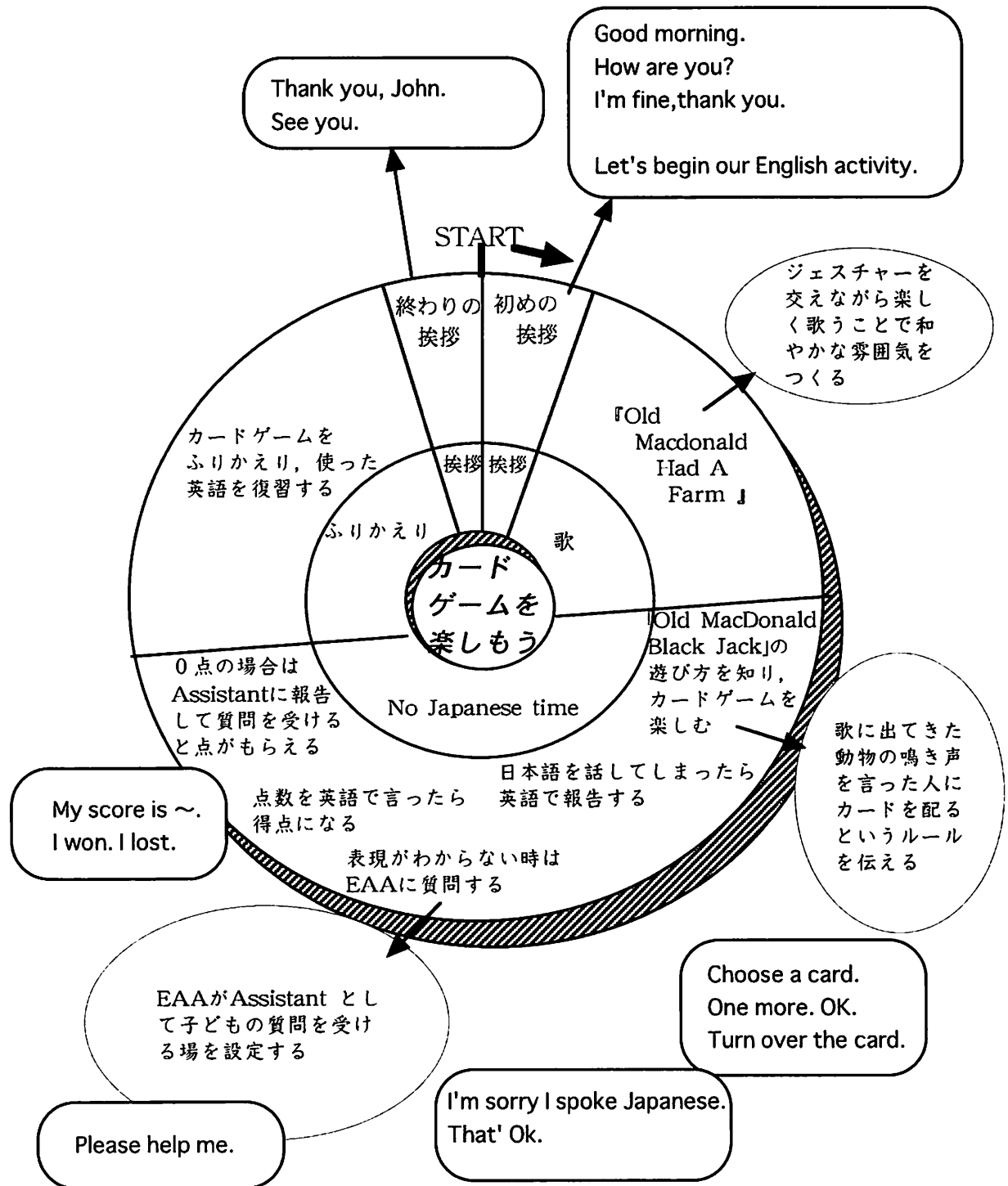
③ EAA, HRT, 子ども同士のかかわりを大切にする

EAAは、子どもたちのAssistantとして、子どもたちが英語での表現の仕方がわからないときに質問を受ける。また、得点が0点だった子どもはEAAのところへ行き、質問に答えなければならないことをゲームのルールとして加えることで、できるだけ多くの子どもたちが1対1でEAAとかかわる場を設定する。

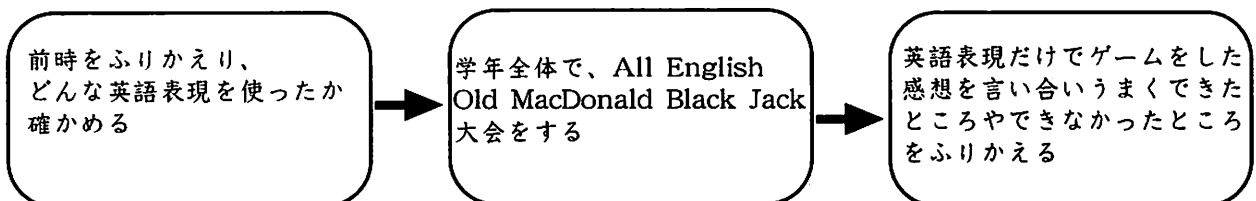
④ 子ども自身の変容の自覚を促す

本時では、ゲームの結果をふり返り、もう一度EAAとゲームをしたり、EAAからの質問に答えたりする場を設定する。この時間に使った英語を改めて表現することによって、子どもたちは新しく習得したことを自覚し、英語への自信を深めることができると考える。

(4) 第1時の活動



(5) 第2時の主な流れ



(6) 本テーマにおける授業の考察

本テーマの「カードゲームを楽しもう」では、日本語で楽しんだことのあるブラックジャックを、今度は英語だけでやってみようという投げかけ、ルールを知っているゲームを再度行う安心感と同時に、日本語ならスムーズに進行させられるが、英語で即座に自分の思いを表現しながらゲームができるであろうかという相反する思いを持たせるところから始まった。カードゲームにはいろいろな種類があるが、ここではdealerとplayerがカードが必要かどうか等、自分の思いを相手に伝えることが必要条件となるブラックジャックを取り上げ、必然的に英語を媒体としてコミュニケーションすることをねらった。本項では、学びを深めるために取った手だてにそって、子どもたちから出た感想等から、英語でのコミュニケーションについての子どもたちの思いや態度の変化をふりかえることによって、考察を進めていきたい。

① 一人一人がゲームにかかわる英語表現を楽しむ場面や状況を設定する

導入時に「Old MacDonald Had A Farm」に出てくる動物の鳴き声をEAAと練習した後、ジェスチャーをつけて歌った。子どもたちは日本語と違う動物の鳴き声の表現を大変楽しみながら歌い、一人一人が自分なりの表現を楽しんでいた。次に、dealerがplayerにカードを配るとき、歌に出てきた動物の鳴き声を英語で言わなければならないルールを設定した。初めは英語表現だけでカードゲームをすることが不安だと言っていた子どもがジェスチャーをつけながら楽しそうに鳴き声を言い、カードをもらう姿も見られ、自然にゲームに入るきっかけとしては有効であったと思われる。



〈ジェスチャーをつけて鳴き声を言う〉

② コミュニケーションをめざした場を工夫する

英語をコミュニケーションの手段として使う場となるように、英語表現のみでカードゲームをしなければいけないというルールを設定した。その場に応じて英語で何を言えばいいのか考えながら話すので、初めはなかなかコミュニケーションがとれない様子であった。また、児童の感想からもどう進めたらいいかわからなかったという思いが出ている。そのため黙ってしまい、うまく進行させられなかったり、ジェスチャーだけで思いを表現したりしているグループもあった。そのグループには、どう言ったらいいのかをアドバイスし、少しずつ英語を話すようにさせた。そのうち子どもたちは、ゲームのおもしろさにも誘われ、徐々に英語を使い、友達同士で教え合いながら、ゲームを進行させていった。初めは小さい声でしか話すことができなかった子どもが、後半には大きな声を出してゲームをしていた。初め抱いていた不安が、ゲーム終了ごとにそれが経験となり、自信

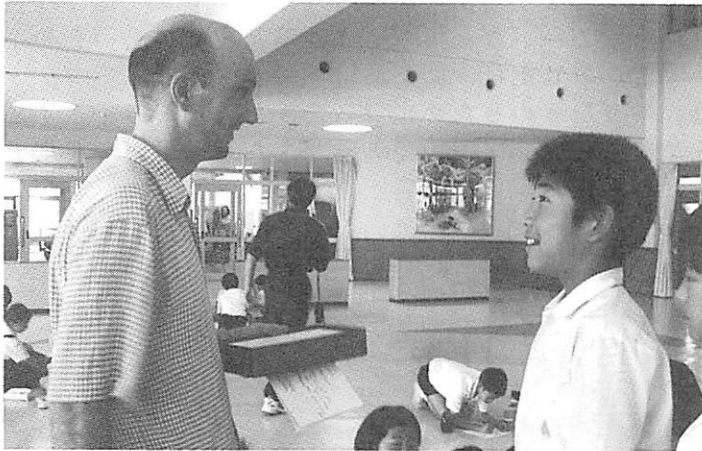


〈教え合いながらゲームを進める〉

impression 英語でゲームをするのはむずかしいけれど、中、
わからなくなったらけども、チームの人に助けってもらったり、
自分で一生けん命思いを言ったりしました。おもしろい、た
り、おもしろいからたまたま、また、おもしろいから、た

に変わっていったものとする。このことから、英語を使う場を設定するだけでなく、その場の子どもの状態や状況に合わせて、教師が適宜アドバイスすることの必要性を強く感じた。

③ EAA, HRT, 子ども同士のかかわりを大切に



<Assistantと会話をする>

impression 今までは日本語の「ラ、クジ、の、ク、け」と、今日は英語で先生達しめたので、おもしろい。今日はもう一回も、先生に「マイスコア、ゼロ」と言わなければなりません。でも、何回も先生に「ゼロ」と言わなければなりません。

impression ターン オーバーカードとか、長い言葉があつた。おぼえるのが、おもしろかった。でも、やっているうちに、簡単に覚えられたので、長かったです。ポイント、なつて、ジョン先生から、ポイントをもらったので、良かったです。

本時は、EAAとHRTのTTであったため、子どもとEAAのかかわりを重視し、HRTはそれをサポートする形が望ましいと考えた。そこでカードゲーム中に、英語でどう表現したらいいのかわからない時はいつでも、AssistantであるEAAに質問してもいいと子どもたちに伝えた。しかし実際、質問にいった子どもは一人もいなかった。これは、ルールを知っているだけに、表現しなくても進行させることができることと、質問自体どう表現していいかわからなかったからではないかと考える。HRTはサポートという意味から、直接EAAに質問に行かせるのではなく、HRTに質問をし、EAAから回答を得るといった形にしたほうが必要に応じた英語を知るという意味で、EAAとよいかかわることができたと思う。

ゲーム終了時に得点が0点だった子どもは、EAA(Assistant)に“My score is 0”と報告しなければならない。そこでEAAから英語での質問を受け、うまく答えることができたならお助け点がもらえるというルールを設定した。もらえる点はブラックジャックの得点と比べると大変低いのであるが、EAAの前に列になって並んでいる子どもたちはみんな、わくわくした表情であった。そして出された質問に対し、自分なりの英語表現で答えた

り、なかなか言い出せない友達には教えてあげたりしていた。子どもの感想からもわかる通り、点がもらえるということよりも、EAAと1対1で話せる機会が子どもたちにとってとても価値あるものであり、嬉しかったのであろう。しかし、EAAが一人であるため、並んでいる子どもの列が大変長くなり、次のゲームまでのロスタイムがかなり長かった。どうしたら、子どもたちが一人のEAAと直接かかわる場をたくさん設定できるか、また、子どものニーズに合ったEAAとのかかわりはどのように組み入れていけばよいのかは、今後の大きな課題であると言えよう。

子ども同士のかかわりについては、英語表現だけでゲームを進行させるという条件により、みんなで一つの目標を達成しようという一体感を持たせることを図った。日本語でブラックジャックをしたときは、勝ち負けにこだわりながら誰もがゲーム自体を楽しんでいた。本時でもゲームを楽しんでいたことには変わりないが、普段よりも友達の表現を注意深く見て相手の言いたいことを理解しようとする子どもや、わからなかったら教えてあげようという姿勢で聞く子どもの姿が見られた。聞き手が受け入れようとする態度であるため、自信がない子どもも自分が属しているグループ内では一生懸命英語を話そうとしていた。英語だけでゲームを進行させられるかと不安な気持ちを持った子どもは、友達とコミュニケーションすることによって、授業終了時には不安を楽しみに変えている。単にカードゲームの楽しさを味わったというだけではなく「英語でやったブラックジャックは日本語でやったブラックジャックとは違うゲームみたいで楽しかった」と嬉しそうに話していた。英語を話そうという意欲、聞こうという意識が見られたことから、英語表現のみでゲームを進行させるという条件は子ども達がかかわり合いながら英語を話すという点で相乗的な効果を得たと考える。

④ 子ども自身の変容の自覚を促す

ゲームの結果をふりかえりながら、EAAの質問に答える時間を設定した。ここで、新しく習得した英語を子どもたち一人一人に意識させることをねらいとしたのだが「この時間に話した英語を言ってみよう」という投げかけはゲームを楽しんだ意識を切るのではないかという判断のもと「今のあなたの気持ちは」とか「あなたの得点は何点ですか」という質問をEAAにしてもらった。ゲームをふりかえるという点では意識は確かにつながっていたが、やはり英語についての自分自身の変容を自覚させるためにはこの時間に使った英語を復習するという時間にすべきであった。実際子どもが使った英語は、“No Japanese” “I’m sorry” と、ついつい使ってしまう日本語を英語に切り替えようとする言葉が多かったようだ。また、EAA(Assistant)の質問を受け、点数をもらいに行くときに言う“My score is ~”もたくさん使っていたが、“Turn over the card”や“Choose a card”などの言葉はアドバイスを受けながら話してはいたが、あまり定着しなかったように思われる。これは、ルールを知っていることが英語表現の必然性という点でマイナスに働いた結果であろう。カードゲームを楽しむにあたって「楽しむ」という内からわき出る感情をついつい日本語で話してしまうのは当然のことで、それを英語で楽しむことは子どもたちにとっては難しいことであったのかもしれない。しかし、不十分ではあっても、英語表現のみでゲームができたという自信を持たせた子どもたちが多かったことは確かである。以下の感想から考えられることは、英語に対する興味の高まり、言い換えれば英語に対する抵抗を少なくできたという変容である。そして、多少なりとも明らかに活動以前の不安は解消されている。この時間で持った自信を今後の英語活動に生かし、積極的に英語を話してみようとする姿につなげていきたい。ふりかえりカードには以下のように、ブラックジャックの得点を書き込む表と、歌に出てきた動物とその鳴き声を線でつなげる問題、そして感想を書く欄を作り、子どもたちがこの時間に活動した過程をふりかえることができるようにした。

impression

日本語を使ったらだめだったから必ずかじかた。でも英語だけで遊ぶことになったことにより、こんどから日本語を使わずじゅぎょうをしたいです。 fano:sikyatabsu.?

impression 日本語がしゃべれなくて“アムソーリー”ばかりいっていたけど英語音でいってみるとまた、ちかうろいんきでいたのしかたが、でも日本語がしゃべれなうしかうシーンとしてたけど、たんたんは来てきてやらやらまでと、うしかういけや、また、英語のブラックジャックをした。

impression 今日の英語でブラックジャックをやって、今日は、日本に慣れている友達には英語を話したり、日本語で話したりして、大変でした。迷いもあつたけど、なんだか少しなじめたようです。楽しいのでまたやり直したいです。と、思います。

<Let's enjoy Black Jack ! !>



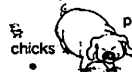
name _____

| | | | |
|-------|--|--|--|
| name | | | |
| times | | | |
| 1 | | | |
| 2 | | | |
| 3 | | | |
| 4 | | | |
| total | | | |

*Connect one dot to another by a line.

cows

chicks



pigs

turkeys



ducks

quack-quack

moo-moo

gobble-gobble

oink-oink

chick-chick

impression

第2時のフリータイムでは、学年全体でOld MacDonald Black Jack大会を行うことを企画する。前時で学習した英語表現を復習しながら、今度は学年全体の友達にやり方を説明したりアドバイスをしたりしなければならない。この立場に立つことによって、一人一人が前時を思い出しながら計画を立てていき、英語に対する自分自身の変容に気づき、英語に対し、より積極的になることを願っている。

(1) テーマ 「曜日」 " Days of the week "

- (2) 目 標 ・日曜日～土曜日の言い方を知り、文字を見て判断する。
・" What day is today ? " " It's Monday. " の表現を使って、曜日が言えるようになる。

(3) 指導にあたって

テーマ設定について

英語活動も4年生になると、英語の表現を楽しみながら学び、コミュニケーションに生かすことができるようになることが求められる。このテーマでは、子どもの日常生活になじみの深い「曜日」を英語ではどういうのかを学び、" I like Sunday " のように自分の好きな曜日を英語で表現したり、" What day is today ? " " It's Saturday. " のように英語で応答したりして楽しむことをねらいとしている。カレンダーなどでSun. Mon.など省略された形で子どもの目に触れる機会も多いので、文字の判別も含めて抵抗なく取り組めるテーマだと思われる。

第1時は、EAAとHRTのTTで指導し、子どもはSundayからSaturdayまでの言い方がわかるようになる。EAAは、発音の指導と"The Very Hungry Catapillar"の読み聞かせをする。第2時(本時)は、HRTとの活動となる。歌やゲームで楽しんだり、簡単な応答を試みることで、曜日を表す言葉の定着を図ることがねらいである。

学びを深めるために

① 一人一人が英語表現を楽しむ場面や状況を設定する

Sunday ~ Saturday の言葉を覚えるために、まず日～土を表した絵を提示する。絵を使ってEAAが発音指導した後で、子どもに文字を提示する。読むのではなく、記号のように何となく判別し、覚えていく上での手がかりになればよいと思っている。また、日～土の順序を覚えるために"Days of the week"という歌に合わせて文字カードを順に上げていくといった簡単な歌遊びも楽しみたい。

また、聞いて分かることが大切なのはもちろんだが、声に出して言うことで英語がより自分のものとなるようにしたい。何回もくり返して友だちに言う、メロディに合わせて歌う、みんなの前で言うなど、声に出して言う場面を意図的に作っていききたい。

② より豊かなコミュニケーションができるような表現を促す

単に Sunday, Monday など個々の単語を知っただけでは曜日の英語が分かったとは言えない。Sunday からの順序があると同時に" It's Friday. " " I like Thursday. " " On Sunday morning, "などといった表現の中で使われていることが分かり、さらに" What day is today? " " It's Wednesday. " などの応答も試みたくなるようにしていくことで、コミュニケーションのチャンスを広げていきたい。HRTは、"Good." "Let's try!" " Here you are. " などの簡単なクラスルーム・イングリッシュを意識的に使うことで英語によるコミュニケーションを活発にしたい。

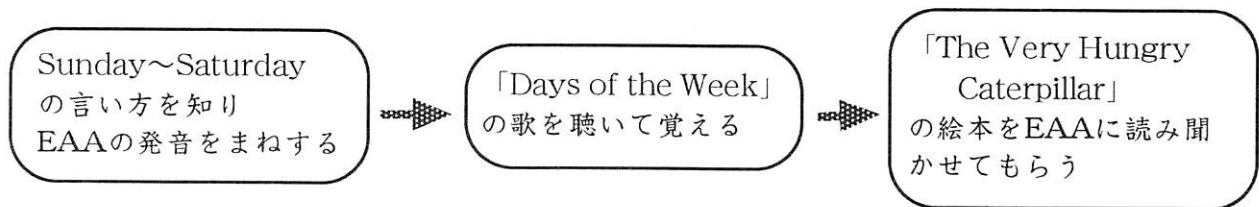
③ EAA, HRT, 子ども同士のかかわりを大切にする

EAAと子どものコミュニケーションを大切にするために、EAAは"The Very Hungry Catapillar"の絵本を読み聞かせをする。子どもが、自分達と英語との橋渡しの役をEAA がしてくれることを無意識の中でも感じ取ることができれば嬉しい。できるだけゆっくり、表情豊かに読むように事前にEAAと打ち合わせておく。

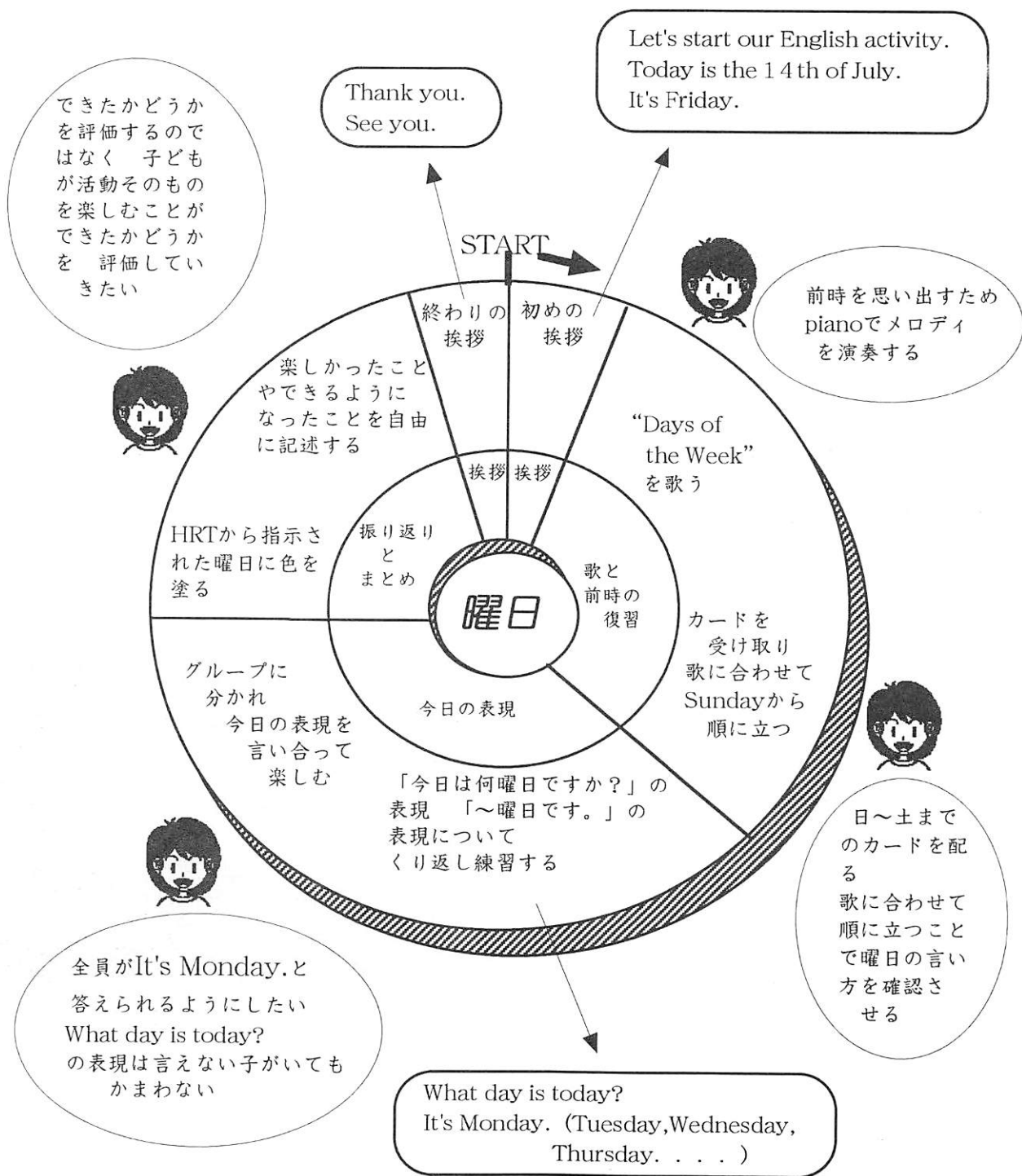
④ 子ども自身の変容の自覚を促す

ふりかえりをする時間や場を、意図的に設けていきたい。それは、歌に合わせてSunday~Saturdayのカードを上げていく活動や、グループに分かれて今日の表現を練習する活動などである。ふりかえりのカードも自由に感想を書くことに加えて、子ども自身が、自分がわかるようになったことを具体的に把握できるように、"Check Monday with yellow."などの言葉かけでふりかえりのワークシートに取り組ませる。

(4) 前時の主な流れ



(5) 本時の活動



4 考察

本年度は次の点について実践を試みながら私たちの考えをまとめている。それは、①1時限の活動のパターン化、②年間20回の活動の組み方(指導体制)、③活動内容の体系化(カリキュラム)の3点である。まず、それを4年の実践と絡めながら考察していきたい。次に5年間の実践を経て私たちが見出した今後の課題について考察を進める。

(1)4年の実践から

①1時限の活動のパターン化について

英語がさほど堪能でもない学級担任が指導するため、活動全体の流れをある程度パターン化している。そうすることによって、教師にもEAAにも子どもにも活動の見通しが持ちやすくなったと思われる。本時案の形式を見た目にも分かりやすくするために、前ページのように示すことにした。

活動は、おおまかに言うと、初めの挨拶、歌、今日の表現、今日の表現を生かした活動(ゲーム等)、ふりかえり、終わりの挨拶である。

・初めの挨拶

C : Good morning , Cathrione . EAA : Good morning, everyone. How are you?

C : I'm fine thank you , and you? EAA : I'm fine too , thank you .

Today is the 1st of June . It's Friday.

C : (repeat)

このように毎時間くり返して言う。そのうちに挨拶の言葉が自然に口をついて出てくるようになってくる。英語活動がいつも金曜日に行われるために子どもは "Friday" しか知らなかった。本テーマの活動を終えて初めてすべての曜日を英語で言えるようになった子が多かった。

・歌

できるだけテーマに関係のある歌を選ぶようにした。本テーマでは "Days of The Week" ("Let's Sing Together" - APRICOT-) という、まさにテーマそのものの歌を見つけることができた。英語の歌は言葉の流れのリズムがつかみやすく、子どもは耳に入った音声をそのまま歌うので、英語を学ぶ上で大変有効な手段であると言える。

・今日の表現

ここで本時のメインの活動に入る。EAAは本テーマの「曜日」の英語を教える。みんなで発音を練習した後、EAAは歌に合わせて絵をさしながら英語の言い方を確かめていった。

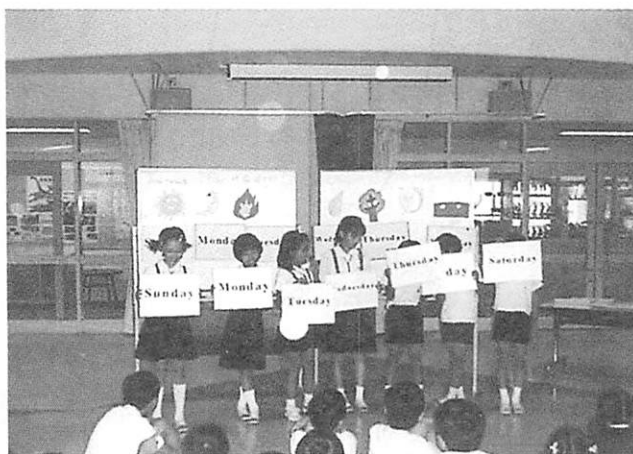
第1時は、この後 EAA が "The Very Hungry Catappillar (「はらぺこあおむし」 Eric Carle)" の絵本の読み聞かせをした。この絵本は日本でもなじみが深く、子どもは自分の知っている言葉が曜日の他、色や食べ物などたくさん出てきたので、興味深く聞くことができた。

第2時では、曜日の単語を英語で表示した。英語の文字は3年生から扱っているが、綴られた単語として登場することは今まで殆どなかった。しかし子どもは、すでにローマ字の学習を始めていたために何となく文字の感じをつかみながら記号のようにして判別しようとしていたと思われる。

・今日の表現を生かした活動

まず、歌に合わせて "Sunday" ~ "Saturday" のカードを順に上げていく活動をした。自分に配られたカードが、何曜日を表すのかがわからないとできないことに加えて、歌の流れに合わせてカードを上げていくことが楽しくて、子どもはこの活動に熱中した。

次に、"What day is today?" の問いに、"It's Wednesday." などと自分の持っているカード



Sunday~Saturdayの文字カードを見る

の曜日を答える活動を行った。

・ふりかえり

意図的に毎時間ふりかえりの時間を設定している。昨年度は、どの学年にも共通で、毎時間同じ形式のふりかえりカードを使用してきた。自由記述中心であったために、子どもは、その時間の活動についての感想を中心に正直に書くことができたが、感想だけで終わってしまうものが多かった。本年度は、2時間で学んだことが明確になるようなふりかえりを工夫することにした。本活動では、第1時は感想などの自由記述、第2時は、第1時の用紙に加えて自分がわかったことを色をぬることで確かめるふりかえりを行った。このようなふりかえりは、私たちが定着度を知らためだけでなく、子どもが自分のできるようになったことを自覚し、次への見通しと意欲につなげていくためにも有効な方法であると考えている。

活動をパターン化することによって、次の活動への見通しが生まれるので、子どもは安心して活動に臨むことができる。また、私たち教師も EAA との打ち合わせがスムーズに進み、子どもの掌握がしやすくなった。

英語活動 ふりかえり
テーマ 「一週間」
Days of the week

月(金) ふりかえりカード
月火水木金土日曜日を
英語で言えた。
曜日の歌を歌った。
はらやこまおましの本を
カトリナ先生に読んでもらった。
感想
木曜日があぶがしかもけど
がんばりした。それに木曜
日は曜日の英語がに
からとナアこしかたであ
ぼくははじめに土曜日が
分からなかつたけどカトリナ
先生が言ってくれたので
Higasi Tomuki

わかったこと・できるようになったこと・感想
ちんとむずかかたけれど一週間の
英語でいえるようになった。
カードに何が書いてあつたかわからなくなつた。
なぜか木曜と火曜が
Name: Higasi Tomuki

A児のふりかえりカード

英語活動 ふりかえり
テーマ 「一週間 Days of the week」

1st. Jane 英語活動ふりかえり
曜日の歌をうたう歌をつたってからカトリナ先生が
「はらやこまおましの本を英語で読んでくれた。
曜日の発音や歌をつたって曜日はどう言うのか
わかった。」

Takahasi Miyuki

わかったこと・できるようになったこと・感想
曜日をどういうふうに書くのか分かった。
曜日の文字を少しだけ読めるようになった。
木曜の発音が前はできなかったけれど今言えるように
Name: Takahasi Miyuki

B児のふりかえりカード

②年間20回の活動の組み方について

本年度から英語活動の時間を昨年度までの倍にあたる20回、20時間とした。(1、2学年は、生活科の中に位置付けられているので従来通り年間10時間行っている。)運営の都合上、EAAが関わる時間が従来通り10時間、残り10時間が主に学級担任(HRT)が指導する時間になる。HRTが担当する他には、学年合同の英語活動として3人の担任が指導したり、そこに級外の教諭が加わったりする場合がある。また、学級単位で活動する場合でも、担任と級外教諭とのTTで行うこともある。

本年度は初めての試みとして、3年以上は原則として一つのテーマを2時間で扱う形をとってみた。そして、第1時をHRTとEAAとのTTで、第2時をHRT一人が指導することにした。5年生の実践例は、第1時のものであり、4年生の実践例は、第2時のものである。第1時でEAAと活動する中で子どもがしっかりわからなかったことや時間が足りなくてできなかったこ

とを、ふりかえりカードで見つけ、それをもとにして第2時の計画を立てる。第2時では、第1時よりもレベルアップした表現を扱う。

4年生の実践では、次のような子どもの姿が見られた。

六月一日 金
今日の英語活動で、まず曜日
を言いました。火曜日と木曜日
が似ていて、特に木曜日の発音
がむずしかったです。なんとか
おぼえて、歌を歌いました。カ
トリナ先生が「はらべこあ
むし」の本を読んでもらって、分
かった言葉がけっこうありまし
た。英語で読んでもらった分
で、言葉があつてもうれしかった
です。

六月十四日 金
今日の3限目は英語活動でし
た。1枚カードをもらって見る
と、土曜日だったのが始
まって最後に立ちました。次に
もう一つのゲームをしました。次
曜日を聞くときの英語がぜんぜ
ん分からなかったのでむずかし
かったけど、やってみるとい
言えるようになりました。今日
は、曜日がかんべきに言えまし
た。

C児のあゆみより抜粋

六月一日 金
今日、2限目英語活動でし
た。初めはサンデーからサチュ
デーまで歌いました。その次は
3年で聞いたような気がする
「はらべこあむし」の本をカ
トリナ先生に読んでもらいま
した。ぼくは、ムーンやハン
リィやストロベリーなどが分
りました。最後に一度サ
ンデーからサチュデーまで歌
い終わりました。まだ上
手い言えなかったので早くか
んべきに言えようになりたい
です。

六月十四日 金
今日、3限目英語活動でし
た。今日は6月1日の続きみた
いなものでした。
初めに歌の順にカードを持
て立ちました。
次にみんなで代わりばんこ
に、何曜日か聞いて、持ってい
るカードの曜日を言うことをし
ました。なんとか言えるよう
になりました。
わかんないこともあるけど英
語活動は楽しいです。

D児のあゆみより抜粋

C児、D児のあゆみ（日記）からもわかるように、2時間で一つのテーマを扱うことでより自信が深まり「曜日の英語は完璧に言えるようになったよ。」と書くまでになったことがわかる。

しかし、中にはこのような感想を書けない子もいて、彼等の英語活動への思いがどうなのかを今後探っていかなければならないと考えている。

以上のことから、今のところ、2時間で一つのテーマを扱うという時間の組み方は、おおむね妥当であるということができると考えている。

③活動内容の体系化（カリキュラム）について

本年度のカリキュラムを作るにあたって、日常用語中心もしくは会話中心の体系で臨みたいと考えた。本校のこれまでの実績と各先進校の実践を参考にしながら作成したのが別添のカリキュラムである。

各学年とも身近なところから教材化を試みた。例えば1年では、

あいさつ → 色 → からだ → 数 → バス → くだもの

2年になると、

あいさつ → 天気 → 学校生活（ゲーム） → 形 → 数 →

のようになる。

また、各学年に配置し、学年が進むにしたがって、難易度を高める内容にしたものも多い。数を例にとると、1年では1～7まで、2年では1～12まで、3年では20までの数を扱う。買

い物をテーマにした活動でいうと、1年では、"Apple, please."という表現を扱うのだが、3年では、

"This book, please."

"Here you are."

"How much?"

"100 yen. Thank you."

などの応答の言い方を扱い、6年になると、

"May I help you?"

"Yes, that looks great!"

"Do you like it?"

"Yes, I do. I'll take it. How much is it?"

"It's 100 yen. Thank you."

のように、買い物の場面のスキットで活動していく。

このように、子どもに身近なテーマの中から、学年発達に沿って易から難へと一応体系化することができた。同じような表現がくり返し出てくるようにしたことも、子どもにとって取り組みやすいものとなっていると思われる。

活動の中に位置付けた歌の扱いについても考慮した。昨年度までの活動でも歌は重要な位置を占めていたが、「今日の表現」とのかかわりを持たせることができないものがあつた。そこで、できるだけ「今日の表現」に関係のある歌を選ぶようにした。2時間で1セットとなっているために、同じ歌を2時間にわたって歌うことになり、子どもも覚えて歌うことができるようになった。高学年では歌詞がやや難しくなるので、さらに時間をかけて同じ曲を扱うようにしている。

2時間を1セットとして、年間10のテーマを原則にカリキュラムを組んだが、これは、私たち教師サイドのプランであつて、EAAや子どもの考えを十分に反映したものとはいえない。そこで、EAAの個性や子どもの考えも取り入れた「フリータイム」による活動を、年間2~3回入れることにした。EAAが単に発音やイントネーションを指導してくれるだけの存在でなく、子どもや私たちとのコミュニケーションを深める対象の人であること、また子ども同士も時には英語を使つてのコミュニケーションを試みることで、思いがけない互いのよさを見つけ合うことを期待している。このプランによって、EAAがさらに積極的に私たちとの打ち合わせに応じたり、EAAと子どもが直接話したりする機会が増えてきたように思われる。

このようにふりかえてみると、活動内容の体系化も一応の成果が得られているが、今後さらに幅広くテーマを求めて行かなければならないと考えている。



"What day is today?" "It's Thursday."の応答を楽しむ

(2)実践をふりかえて

4年の実践のふりかえりをもとに、英語活動全般にわたる考察をしてみた。それぞれに一応の成果が期待できると考えているが、まだまだ課題も多い。

①の活動のパターン化については、同じパターンをただ機械的にくり返すのではなく、EAAと十分な打ち合わせを行うと同時に教材などをさらに周到に準備しなくてはならないだろう。また、現段階では、学年3クラスが同じプランで活動しているが、子どもの実態や学習環境、教師の個性に合わせて、パターン化のよさを生かしながらもより柔軟なプランをたてていく必要があると思われる。加えて、資料をより充実させなくてはならない。

②の20回の活動の組み方については、2時間で一つのテーマを扱うことに今のところ異論はない。今後は、第1時がHRTだけによる指導になったり、数時間続けてEAAが担当したりと、さらに柔軟で融通性のある時間の組み方が問われるようになるだろう。また、テーマ数やその内

容は常に検討しよりよい方向を探っていきたい。

③の体系化については、今後一層の検討が求められてくる。子どもにとって英語で表現することがどんな意味で役立つのか、年間20回の活動でつけるべき英語による「コミュニケーション能力」とは何なのかを私たちは考えていかなければならないと思っている。

本校は、アメリカ合衆国メイン州サウスパーウィックにあるパーウィック初等学校と姉妹校の関係にある。さる6月、一人のパーウィック校の先生が本校を訪れ、その歓迎の集会の折のことである。全校で英語の歌を歌い、子どもは口々に "Hello ." " Welcome ." " Nice to meet you." などの挨拶をすることができた。ところが、自分から望んで話をしたいと名乗り出た子どもの中で、その先生と会話できた子はごくわずかで、英語で話したにもかかわらず、さらに英語で通訳しなければならないことになってしまった。コミュニケーションを大切にしてきた私たちの取り組みだが、「会話」するためのイントネーション指導、「会話」のリズムやスピードなど、心も話も通じ合うためには、まだ多くの乗り越えなければならない壁があることを実感したできごとであった。

加えて文字の扱いが課題として残っている。今年度は、文字を「妨げない」という消極的な思いで扱っている。具体的には、"7 Steps" の歌と同じメロディで、"ABC Steps" として取り上げ、A～G までの7文字を3年生で指導している。しかし、英語の歌の歌詞などは、1、2年生の子どもの前にも提示するし、単語を綴って提示することも多い。読めなくても記号のように何となく判別できるようになればよいのではないか、パソコンのキーボードで目に触れることが多いから特に気にせず自然に使っていればよいのではないか、キーボードだけでなく、アルファベットや英語の文字そのものが日常的に生活に入ってきている現状からもっと積極的に教えてもよいのではないか、ローマ字の指導がすんだら積極的に指導すべきではないかなど、私たちの中にも様々な論議がある。基本的には、中学校で学ぶことの先取りをするという思いはないので、それではどの程度、どのように扱っていくかがこれからの課題であろう。

今も触れたが、中学校との関連において、十分な検討がされているわけではない。現在のところ私たちがとらえる英語活動は、中学校からの学問体系に基づいた英語学習の「土壌づくり」あるいは、「たがやし、種をまくこと」に相当すると考えている。子どもが中学校に進んで初めて英語に出会うよりも、英語に対する抵抗が少なく入門期の英語学習に容易に入ることができるだろう。しかし、文字のみならず単語の綴り、構文、文法などは全く活動内容には入れておらず、そのあたりからは中学校からの指導に委ねたい。

成果と共により多くの課題を抱えている英語活動である。今後もさまざまな情報を積極的に受け入れながら、よりよい方向を探っていきたい。